

春風秋霜

江利川毅 県立大理事長



今回は、少し私事にわたる話である。2009年夏に厚生労働事務次官を辞した後、埼玉医科大学の丸木清浩理事長(当時)のお誘いを受け、同年10月に同大の特任教授に就任した。医師を志す若人に医療人としての心構えを考える契機となるような講義をしようと思っていた。ところが、民主党鳩山内閣から予期せぬ要請を受け、同年11月に人事院総裁に就任した。教壇に立つこともなく、埼玉医科大学を辞することになった。

12年4月に人事院総裁の任期満了となり、翌13年4月に埼玉医科大学の特任教授に戻していただいた。14年4月からは、上田清司知事の要請をお受けし、

志は気の師なり

教える立場になつて

埼玉県立大学の理事長も務めている。

埼玉医科大学では各学年の学生に年1回の特別講義をし、県

することを織り込みながら、話すようにしている。

1年生には、大学での「学び」

の話をする。大学の学びは、高校までの問題を解く勉強ではなく、問題解決力を身に付ける学びでなくてはならない。まず、「論語」の冒頭の「学んで時に之を習う。亦説ばしからずや」を説明する。「習」という字は、

生に年1回の特別講義をし、県ひな鳥が巢の上に立つて羽をは

張るよう自分を鼓舞してくれる

「ぶ」といふことであると、話を

併せて、志が大事であること

を説明する。「習」という字は、

であると考え、昨年、教職員からの提案を踏まえつつ、基本理念を制定した。

「本学は、陶冶、進取、創発

を基本理念として、保健医療福祉に関する教育・研究の中核となつて地域社会に貢献します」と

と本学のミッションをつたい、陶冶、進取、創発に込められた意味を説明している(県立大学ホームページ参照)。卒業して

■先輩を超える気概を

私は、国家公務員としての仕事に就いて、自分なりの心構えを持つてきた。先輩の中には尊敬すべき人も多くない人もい

るが、たとえ尊敬する人であってもその人と同じようなことを

しては、行政の進歩はない。

私は自分に「後輩(＝自分)

の存在意義は先輩を乗り越える

ことにある」と言い聞かせて踏

ん張つてきたつもりである。本

学の教職員にも、さらには若人

を指導する立場にある多くの人

々にも、同じような思いを共有

してもらいたいと思うのであ

る。

若い人に一言。大学に入学し、

あるいは社会人になって1カ月

くらいたった今ごろは、いわゆる

五月病にかかりやすい。そんな

時は自分の原点である志に立

ち返り、何をすべきかをしっかりと

考え、自分の目指す道を進み

続けてほしい。

(次回は6月12日付)

立大学では1年生のスタートアップセミナーのほか、看護学科などで年数回の特別講義をしている。若い人の成長にプラスになるような話をしたい、そういう夢がかなった状況にある。

「習得・実践する力」
講義では、普段の授業では触れることが少ないと思われる「心構え」とか「生き方」に関

思つ(「説」の意味)。そして

野の人材を育成している。私は、同種の大学の中で本学を日本一

野の人材を育成している。私は、同種の大学の中で本学を日本一